

特集 読書の広がり

本を読もう。

もつと本を読もう。

もつともつと本を読もう。

—長田弘『世界は一冊の本』より—



『青の炎』『ローワンと魔法の地図』『カラフル』の3冊は19ページの「生徒のアンケートから」で紹介しています。

座談会

本を好きになってもらいたい



甲斐利恵子 (かいらいえこ)

台東区立忍岡中学校教諭。主な著書に対談集で『子どもの情景』(光村教育図書)、共著で『聞き手話し手を育てる』(東洋館出版)、『中学教師もつらいよ』(大月書店)などがある。



金原瑞人 (かねはらみずひろ)

法政大学社会学部教授、翻訳家。訳書に『かかし』(徳間書店)、『のっぽのサラ』(ベネッセコーポレーション)、『豚の死なない日』(白水社)、『青空のむこう』(求龍堂)ほか多数。



武田朗江 (たけだあきえ)

千葉市学校図書館指導員。5年前から、千葉市の小学校、中学校の図書館指導員を勤める。

ハリー・ポッター

甲斐：子どもたちの間でも「ハリー・ポッター」が大ブームになりました。あの分厚い本をたくさん生徒が読み、第四巻の『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(J・K・ローリング/静山社)は、「今読んでいる本」ということで尋ねてみたら、一時期、半数ぐらいの子どもが名前を挙げました。今までになかった現象ですね。

武田：ほんとついにそうです。小学二年生の子どもでも借りていって、楽しんでましたね。こういう現象はなぜ起こったのでしょうか。

金原：それが、出版界でもよくわからないんです。いろんな要因があったと思いますよ。マスコミの取り上げ方や書店の売り方、訳者の作品との出会いのドラマもありましたね。ただ、作品としてみると、すごく入っていきやすい、ストーリーが練られている、知恵と勇気と友情と、難しいことをいわない、という点を受けたのだと思います。

甲斐：「ハリー・ポッター」が出てから、実は改めて『ゲド戦記』(アーシュラ・K・L・グイン/岩波書店)を読んでみたんです。するとね、あ、ここは「ハリー・ポッター」のあの場面で使われている、ここはあそこだと思つてくるがいくつも出てくるんですね。

金原：そうですね。「ハリー・ポッター」はファンタ

ジーのおもしろいところの寄せ集めなのです。魔法・謎解き・勇気・友情ですかね。今まで出ていたファンタジーはおもしろい部分もたくさんもっているんだけど、例えば『ゲド戦記』は実は難しい。「ナルニア国ものがたりシリーズ」(『ライオンと魔女』ほか)C・S・ルイス(岩波書店)はキリスト教のバックボーンが必要だったり、展開が遅かったりするんです。ミヒヤエル・エンデは教条的な部分があつて、いずれも今の子どもたちにとつてはなじめないところでもあるわけです。それを「ハリー・ポッター」はすべて取り払つて、テンポよく壮大なエンターテイメントとして仕上げているんですね。とにかくおもしろい。これは、大事なことです。

武田：ゲームをやっている感じで読み進めますね。
金原：そうですね。ファンタジーを受け入れる素地が、「ドラゴンクエスト」「ファイナルファンタジー」などのゲームに親しんだ今の子どもに作られていたという側面もあつたと思います。
甲斐：「ハリー・ポッター」のあと、ずいぶんファンタジーが出ましたね。

親の離婚や友人との葛藤をのりこえていく主人公を描くことで中高生の共感を得てきた。スーザン・E・ヒントンや魚住直子などのタイプですね。でも、しばらくたつと、読んで楽しい、勇気を与えてくれるものはないかとなつてきました。「おもしろい」をキーワードにして振り子が大きく振れはじめたんです。今はそのいちばん大きく振れたところにいるんじゃないかな。「ハリー・ポッター」のヒットもそれに関係していると思いますよ。ただ、また、振り子が戻ってくるかもしれません。もう一つは日本の一般書を出す出版社が、海外ではヤングアダルトと呼ばれるものを手がけ、国内で一般書として出すことが多くなりました。僕が訳したもので、『豚の死なない日』(ロバート・ニュートン・ペック/白水社)『青空のむこう』(アレックス・シアラー/求龍堂)などがそうです。これで読者層が広がりましたね。



甲斐：そういえば、「大人も楽しめる児童文学」というキャッチフレーズもありました。

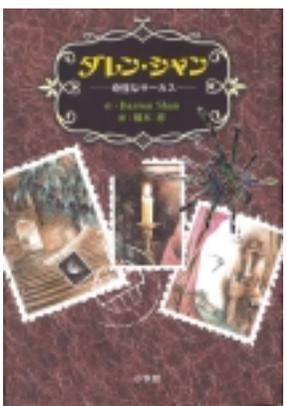
た潜在的にいる子どもの読者を掘り起こした、という感じがします。僕は『レイチエルと滅びの呪文』(クリフ・マクニッツ/ユノ理論社)を始めとするレイチエルシリーズを訳しているのですが、戻ってくる読者カードが十歳から十五歳なんです。今まで児童書の読者カードはたいてい三十歳から五十歳の女性からでした。明らかに子どもたちがちゃんと読んで「本って意外とおもしろいなあ。」と思ってくれているんだなあと感じました。でも、すべての子どもが「ハリー・ポッター」からほかの本につながっていくのはいんです。それは個々の資質の問題だと思えますね。



大人も楽しめる児童文学
武田：ヤングアダルトと呼ばれるジャンルも傾向が変わりましたか。

金原：二つのことがいえます。一つは全体の傾向がエンターテイメントにシフトしています。七〇年代、ヤングアダルトという分野が出てきたときは、社会的側面や両

甲斐：「活字離れ」といわれてだいぶたちますが子どもたちの様子はどうですか。
今の子どもは本を読む？



れましたし、「パルト文庫から紫式部まで幅広く読む子どももいます。本の厚さに関係ないですね。でも、「ハリー・ポッター」は読んだ、『ダレン・シャン』は読んだ、ほかの本は読めなかったという生徒もいますし、残念ながら読まない子どももいます。

甲斐：わたしの生徒たちを見てみると、幸いなことに「活字離れ」の実感はありませんね。基本的に「おもしろいこと」には敏感で、それが「本」であるうとなかると関係ないという感じなんです。今、三年生を担任してますが、この前、体育の時間が自習になって図書室に行くことになったんです。ほんとにその時間ページをめくる音しか聞こえませんでした。それこそ、シャツを出して



腰でスポンをはいているような男子生徒が、石田衣良の『池袋ウエストゲートパーク』（文藝春秋）を持って、「すごいおもしろかった。続きがあるって聞いたんだけど。」ときいてくるんです。見てみると、本のおもしろさを知ったなどという感じがあります。いろいろな本を読んでみよう、本を選ぼうという気持ちを感じますね。ただ、武田先生もおっしゃたように読書になじまない子どももいますね。

金原：「活字離れ」って僕が小さいときからいわれてました。今はもう、テレビ、漫画が出て、ゲームも一般化し、ほかに楽しいことはたくさんあります。本を読む時間が少なくなったのとはたくさんあります。本を読む時間大学生を見ると、本好きといわれる学生の質が変わったんだと思いますね。昔の本好きは、ドストエフスキもスタンダールも夏目漱石も、名作の多くを讀破して、かつ何かあるこだわりがあった。シェイクスピアの作品なら、ほとんど讀んだなんていう学生もいました。なにがしかの読書観をもってましたね。今はそれが無い。

この本、表紙はまいちだけど、おもしろいよ。」と教えてくれたり、友達に教えてたりしますね。わたしがすすめるよりも友達のひとりのほうがずっと力をもっていますね。

甲斐：ほんとつにそうです。国語の時間に教師が力を入れて紹介するのもいいですが、休み時間のさりげない子ども同士の会話のほうに威力があるんですよ。ただ、先生とも友達同士とも、本のことを話題にするのが当たり前な雰囲気、本がいつもそばにあるような環境は整えてやりたいと思いますね。

武田：子ども同士の会話のきっかけも作ればと思いますね。実はこの座談会に出るといって、よく図書室にくる子どもに話をきいたんです。「一か月どれくらい読むの?」「いつ読むの?」って。すると近くで聞いていた子どもも「どこで手に入れるの?」と質問して「古本屋」「えっ。どこにあるの?」「学校のそばのスポーツ用品店の隣だよ。今度いつしよに行く?」と会話が広がって、これは偶然でしたけど、子ども同士の会話のきっかけ作りも大事かなと思いました。あと、甲斐先生の環境といふことの一つとして、時間の確保があると思いますね。中学生は、学校行事に部活に塾にとほんとつに忙しい。わたしの行っている学校では「朝の読書」をしているのですが、その十五分という時間を保障することが大事だ

おもしろいといわれているものは、ほとんど讀んでるけど、という感じ。それと同じことが映画好きの学生にも演劇好きの学生にもいえるんです。教養としての読書の時代は終わったのかなとも思います。

甲斐：重厚なものを讀まなければ本を讀んだことにならないというのは大人の身勝手かもしれないですね。もつと気楽に子どもたちの読書傾向を見ていつていいのかもしれないですね。

金原：すべての子どもを本好きにすることは無いと思います。理科の実験が好きで子どももいるわけですし。だって物理が嫌いな大人ってたくさんいますものね。(笑)

子ども同士の言葉が効果的

武田：指導員をしていると、子どもたちから教えられることがほんとつに多いんです。本を手にとってもらいやすいように配架の工夫をしたり、ブックトークをしたりするのですが、わたしがこれが読みやすいと思って子どもはどうか、反対にわたしは良さがよくわからないんだけど子どもはどうか、というときには、子どもにきいてみます。本のことなら、ストーリーから、こんなところに感動したということまで、さまざまな情報を教えてくれます。あと、新刊の情報は生徒のほうで早いときがあり、図書室に来た子どもが、「先生、

と思いました。「朝の読書」の時間があつたから好きな本を讀むことができたという子どもは多いですね。

読書は個人的なもの

甲斐：武田先生は、子どもから「おもしろい本ない?」ときかれたらどうお答えになりますか。

武田：子どもは千差万別です。まず、その子どもの読書傾向をきいて「コミュニケーションをとってから、自分の考えをおしつけないように、これはこんなお話なんだけど、どう?」「子どもに尋ねながら紹介しますね。本の好みは一人一人違うので。

甲斐：そうですね。生徒からそうきかれたら、まず「今までにいちばんおもしろかった本は何?」ときいて「だ。」という答えの内容によって、数少ない自分の頭のブックリストから選びます。そのとき、本の難易度だけではだめな気がしますね。「ハリー・ポッター」のあんな本本讀んだらいい?」ときかれて森絵都の『リズム』（講談社）を紹介したんですけど、「先生、読めなかつた。」と言われました。読みやすいだけではだめなんですね。傾向もありますね。ほんとに個々人のもっている読書歴や興味・関心を知らないといつて読書はすすめられません。

武田：でも難易度も重要です。「ハリー・ポッター」お

もしろかった、『ダレン・シヤン』おもしろかった、次に『指輪物語』（J・R・R・ Tolkien / 評論社）を読みたいんだけど。」と言われても、「ちょっと待って。その前に『ホビットの冒険』（J・R・R・ Tolkien / 岩波書店）を読んでみて。これがおもしろかったら、『指輪物語』を読んでみよう。』と言わないと、せつかく本のおもしろさに気づきはじめてのに、難しく、またいやになってしまったら残念ですから。

金原…物語だけではなくて、エッセイやノンフィクションも視野に入りたいですね。僕は中学時代、戦記ものが大好きでした。今も好きな子どもはいるんじゃないかな。

専門家の必要性

甲斐…武田先生の勤めていらっしゃる千葉市は、小学校はすべて指導員が入り、中学校にも一週間のうち何日かは行っているとききました。

武田…そうなんです。千葉市では、学校図書館充実推進事業計画に基づいて、市内全小学校一―九校に学校図書館指導員が入って、成果をあげていると聞いています。小学校に入った指導員が、近くの中学校にも巡回指導に行っているんです。全国に誇れる先進的な行政施策だと思っっています。中学校はわたしたちがいる日は図書室の鍵が開けられ、自由に出入りできるようになってよかったです。

金原…（環境を整えるという点では）わが家でも工夫しているんですが、自分の息子が本を読まないんです。自分が訳したものをそれとなく周りに積んでおいたんですが、さすがにこれはだめでした。（笑）

本ってなんだろう

本ってなんだろう

甲斐…『間取りの手帖』（佐藤和歌子 / ノリトル・モア）という本が出て、それは間取りが載っているだけなのですが、生徒たちはそれを見て「ここはさ、やっぱりペットを運動させやすいんだよ。ペット飼っている人が住んでるね。」「これ

だとお風呂に入るとき着替える」とトイレにきた人に見られるわけ。そんなのいやだ。これは一人暮らし用だ



たと聞きました。わたしの友達がやっているのですが、中学生にも朝の読書の時間に、絵本などの読み聞かせをするよ、よく聞いてくれるといっています。また、生徒がよく話しかけてきてくれますね。おもしろい本を読むとだれかに話したくなるようです。わたしはただ聞くだけです。

金原…「聞く」ということはほんとに大事だと思えます。専門の知識をもった人だとおすばらしい。いいですね

工夫した取り組み

武田…この前、国語の時間をいただき「ブラックシアター」をしました。真つ暗にして蛍光絵の具を塗った絵のところだけが浮き上がるようにして、『耳なし芳一』（ラファディオ・ハーン / 講談社ほか）の読み聞かせをしました。平曲のところはCDを聞かせました。趣向を凝らすと、中学生もくいついてきます。「平家物語」との関連もわかり、興味を引いたようです。さらに、ブックトークが生徒同士で上手にできるようになりました。テーマを決めて、学年を越えてさまざまな本を紹介しています。物語のほかにノンフィクションの分野からも本を選んでるので、さすが中学生だなと思いました。

甲斐…素敵ですね。わたしもときどき朗読劇場と称して、朗読による読み聞かせをします。すると、難しいといわ

よ。」と真剣に話しているのです。それを見ながら、本そのものに対する自分の考えを上げなければならぬなあと思えました。本を通して遊んだり考えたりできる。現実の問題は解決しないかもしれないけど、いやされたり、考えたり、元気をもらったりするんだなあ。わたしも肩の力を抜いて本の世界を生徒と楽しみたいなと思うようになりました。

武田…本について語っている時間を共有できるというのは楽しいですね。読書は一人一人のものだと思います。その子どもなりの本の世界をもっています。それを大事にしたいですね。

金原…読書は本の好きな人の楽しみだと思えます。本を好きでない人にはその人なりの楽しみがあるわけですが、潜在的にいる本好きの子どもに、おもしろい本に出会って本を好きになってもらいたい。

甲斐・武田…ほんとうにそうですね。本を好きになっ